SPECIAL INTERVIEW

森 友哉

堺ビッグボーイズ出身
[埼玉西武ライオンズ]

「中学時代に野球を好きになれたから今の僕がある」

TOMOYA MORI
SAITAMA SEIBU LIONS #10

～プロ選手が語る中学硬式時代～

プロ野球の中にも中学硬式に励んだ選手が多数いることは皆さんもご存じだと思う。そこで巻頭インタビューでは、プロ選手に中学硬式の思い出を語っていただこう。今回、登場するのはプロ2年目のシーズンに奮闘するレオの背番号10だ。大阪桐蔭高時代には史上7校目の甲子園春夏連覇にも貢献。そんな森選手の野球の原点は中学硬式にあった――。

取材・構成／江口義忠　写真／川口洋邦、BBM　取材・写真協力／堺ビッグボーイズ

小学2年で左打ちにとにかく「打ちたい！」

——森選手は5歳くらいから野球を始めたとお聞きしました。

森 幼稚園の年中、年長くらいから庭代台ビクトリーというチームに入って野球を始めました。このチームから、堺ビッグボーイズへ進む仲間たちが多かったので、僕も堺ビッグに入りました。当時はチームも強かったですからね。

——なるほど。中学校の部活動ではなく、クラブチームで硬式野球をやりたいという思いが森選手にはあったのですね。

森 その気持ちはありましたね。どうせやるのなら、硬式がいいと思いました。堺ビッグは平日も練習がありましたし、やっぱり、遊びたい気持ちもありましたから中学校の部活動には入らずにチームの練習だけをやっていました。

——小学校時代から、バッティングの素晴らしい選手として注目されていた森選手ですが、中学当時の体の成長具合は？

森 たぶん中1のときは、156センチくらいだったと思います。中3の頃で170センチ弱ですから、今と変わらないくらいまで伸びたと思います。

——当時から、やはりバッティングが一番好きだった？

森 そうですね。でも、ただ単に好きなだけでした。打席では何も考えていなかったですし、とにかく「打ちたい」「打ちたい」という気持ちだけでバットを振っていたように思います。

——ちなみに、なぜ、左打ちになったのでしょう。

森 小学校2年生のときだったと思います。親から「左で打ったほうがいいんちゃう？」と言われたのがきっかけでした。当時は右でもそれほどバットが振れていたわけでもなかったので、特に苦労もなく左打ちになりました。体の成長も遅くて打つ・打たないというレベルでもなかったですしね。

——今は右でも打てる？

森 まったく打てませんよ（苦笑）。

——中学生になり軟球から硬球へと変わり、怖さのようなものはありませんでしたか。

森 それは特になかったですね。むしろ、少しでも早く硬球を握りたいという思いのほうが強かったと思います。

——例えば、バッティングに関しても、バットの芯を食ったときの飛距離は硬球と軟球ではまったく違いますよね。

森 そうですね。硬球をジャストミートしたときの感覚。それが本当に気持ち良かったです。

細かな技術指導はなく木製バットで逆方向へ

——では、堺ビッグボーイズでの3年間について詳しく教えてください。

森 正直、遊びたい気持ちが強くて、練習に行くのがイヤに感じたときもありましたよ（苦笑）。でも、実際に（練習へ）行ってしまえば仲間もいますし、野球も面白くて……っていう感じの3年間だったと思います。

——家から練習場に向かうまでが大変だった……と。

森 何度も「イヤやな～」と思いました。とにかく練習はそんなに好きじゃなかったです。でも、試合をするのは大好きでしたし、仲間と一緒にいることがとにかく好きでしたね。それがあったから辞めなかったんだと思います。

——堺ビッグボーイズは、野球以外の活動も盛んだとお聞きしました。

森 サッカーですとか、他のスポーツもやらせてもらっていましたね。当然、あいさつや礼儀といったことも教わりました。

——では、ポジションに関してはどうでしょうか。

森 自分の好きなところでやらせてもらいました。僕がやったのは捕手、投手、三塁手の3つでしたけど。

——イヤだった練習の中にも、今振り返ると「タメになったな」と感じるメニューもあったと思いますがいかがでしょうか。

森 当時からフリーバッティング練習は木製バットを使ってやっていました。そして、とにかく「逆方向」を意識して打っていましたね。今思えば、あの練習があったから逆方向へも打球が飛ばせるようになったのかなと感じています。

——中学生が木製バットを使うのは重さも含めて大変ですよね。

森 そういう中でも、何とかして打ってやろうと思いながら練習していたのが良かったのかもしれません。今につながっていると思います。

——中学当時で、技術的なアドバイスなどはあったのでしょうか。

森 いいえ。特に細かい打撃指導は受けていませんでした。練習でも試合でも、本当に好きなように打たせてもらっていました。バッティングに関しては、当時から自信がありましたし、試合では「早く俺に回って来い」としか考えていませんでした。

——現在の打撃フォームと比べて中学当時のフォームはどうだったのでしょうか。

森 当時はそういうこともまったく考えていなかったので、自分でもよく分かりません。

——では、高校時代とプロでのフォームについてはいかがですか。

森 高校時代のフォームもそれなりにきれいだと自分では思っています。プロに入って感覚的に変わってきた部分はあるのだと思いますが、ただそれは自分で変えようと思ってそうしているわけではないんです。

——あくまで、プロの投手にアジャストするための工夫ということでしょうか。

森 そうですね。見た目では若干変わっているのかもしれませんが、僕の中では構えや形ではなく、あくまでも感覚の部分での違いだと思っています。

——大阪桐蔭高では、打撃の際の「軸足の重要性」がチームの指導にもあったと思いますが。

森 確かに軸足は大切だと思います。と言っても、高校時代も西谷（浩一）監督から細かい指導は特にありませんでした。僕自身も何も考えないで打っていた……というのが正直なところですね。

——ちなみに、高校時代は狙ってスタンドインさせていたのですか。

森 狙ったら、たぶんホームランは打てなかったと思います。シンプルに強い打球を打つこと。それだけでした。特に球種やコースを読むというようなこともなく、来た球に反応するというのが基本でした。

■埼玉西武での打撃フォーム

「試合は大好きでしたし、仲間と一緒にいることがとにかく好きでしたね」

～プロ選手が語る中学硬式時代～

SPECIAL INTERVIEW
森 友哉
TOMOYA MORI #10

PROFILE

もり・ともや／1995年8月8日生まれ。大阪府出身。170cm80kg。右投左打。5歳から庭代台ビクトリーで野球を始め、東百舌鳥中では堺ビッグボーイズに在籍。2度の全国大会とジャイアンツカップ出場。ジュニア・オール・ジャパンにも選出されアメリカ遠征にも参加した。大阪桐蔭高では1年秋にベンチ入りして正捕手として活躍し、4季連続で甲子園に出場。2年時には春夏連覇を達成した。13年秋のドラフトで西武に1位指名され入団。プロ2年目のシーズンを迎えている。

「野球をするときは目の色を変えて真剣に取り組む。でも、遊ぶときは子どもらしく思いっ切り弾ける」

中学生らしく遊んで野球とのメリハリが大切

——当時、藤浪晋太郎投手（大阪泉北ボーイズ。現・阪神）と対戦し、ヒットも打っているんですよね。

森 藤浪さんとは家も近かったですから以前からの知り合いでした。狭山ボーイズにいた田村（龍弘）さん（現・千葉ロッテ）、北條（史也）さん（現・阪神）にも当時から遊んでもらっていましたし、そういう知っている先輩たちと試合ができるというのも楽しみの一つでした。

——森選手は、ジュニア・オール・ジャパンのメンバーにも選ばれアメリカ遠征も経験していますよね。当時の思い出は何かありますか。

森 正直、投手に関してはそれほど驚くことはなかったですね。ただ、アメリカチームの打者は、試合で最初は木製バットを使っていたんです。「大したことないやん」と思っていたんですけど、最終回に金属バットを使ったら、えらい打球でした。やっぱり打撃はすごいなと思いましたね。体格に違いはあっても同い年ということを考えると、さすがに驚きましたね。

——では、現在の中学球児たちに森選手からアドバイスするとしたら、どんな言葉をかけますか。

森 自分の中学時代を振り返ってみると、まったく深くは考えずに野球をやっていたなと思います。当然、プロ野球を意識するようなこともありませんでした。とにかく、遊びたい。でも、野球もやりたい。そんな毎日だったと思います。そう考えてみると、今の子どもたちにも、野球をするときは目の色を変えて真剣に取り組む。でも、遊ぶときは子どもらしく思いっ切り弾ける。そういうメリハリさえしっかりしていればいいのではないかなと思います。

——本当に野球に打ち込むのは、高校野球からでも遅くはない？

森 僕はそう思いますね。中学からアホみたいに野球だけしかやっていなかったとしたら、正直楽しくないと思います。

——大切なのは、中学硬式を通して、「野球を好きになること」ということでしょうか。

森 はい。僕は堺ビッグに行って、楽しい野球をさせてもらいました。あの体験があったから野球をもっと好きになれたと思いますし、高校でも真剣に打ち込めました。もしも中学で野球が嫌いになっていたら、今の僕はいないと思いますしね。そういう意味でも、僕は堺ビッグに入って後悔はないですし、感謝しています。なので、今の中学球児の皆さんにも、とにかく野球を好きになってもらいたいと思います。

——では最後に、プロでの今後の抱負をお聞かせください。

森 今シーズンでプロ2年目を迎えましたが、なかなか打てない日も続いて、もっと頑張らないといけないなと思っています。さすがに、バッティングについてもいろいろと考えるようになりましたしね。もちろん、守備も走塁もレベルアップさせてチームの勝利に貢献したいと思っています。

■大阪桐蔭高時代の打撃フォーム

～プロ選手が語る中学硬式時代～

当時の森友哉選手の思い出

堺ビッグボーイズ　土井清史監督

森は小学時代からオリックスのジュニアチームで活躍していたので、当時からすごく打撃のいい子だという情報は耳にしていました。そして中学に入り、ウチに入団してくれてからも、中心選手として活躍してくれました。体は小さかったですが、打撃だけでなく足も肩も素晴らしかった。野球に関するセンスに恵まれていましたね。1年生の頃はサードを少しやって、2年生ではチームのエース格として投げてくれました。試合では学年が1つ上の藤浪（晋太郎）君と投げ合ったり、田村（龍弘）君や北條（史也）君とも対戦していましたね。

ただ、彼の将来を考えたときに投手と捕手で、どちらのほうが大成するのかとコーチ陣とも話し合い、最終的には捕手だろうという判断になりました。森自身もそれを素直に受け入れてくれましたよ。

とにかく打撃に関しては、何も教えることはありませんでした。森に限らず、あれやこれや細かく指導することはウチではしていませんが、彼については試合でもノーサイン。3ボールからでもガンガン打たせていました。本当に凡打するシーンは少なくて、森がアウトになった場面は数えるくらいだったと思います。それにスタンスを広く取って、高い位置にグリップを持ってくる森の独特の構えも、中学時代から変わっていないように思います。

打撃練習での、逆方向へ強い打球を打つという方針は、現チームでも同様にやっています。ただ、木製バットで打たせるのは全員ではなく限られたメンバー。森に金属バットで打たせると飛び過ぎる……という面もあったのは事実でしたからね。

やんちゃな子でしたけど、チームに来れば仲間と一緒になって一生懸命に練習していました。大阪桐蔭でも素晴らしい活躍をしてくれましたし、プロでも頑張ってくれると期待しています。チームの子どもたちと一緒にこれからも応援しています。

[Team Data]　**堺ビッグボーイズ**
大阪府堺市北区百舌鳥陵南町3丁165-1

ボーイズリーグに所属し30年以上の歴史を持つチーム。公式戦には「堺中央ボーイズ」として出場している。全国大会にも数多く出場しているが、同チームはNPO法人「BBフューチャー」を通して世界に羽ばたく人材育成に取り組んでいる。公式ホームページあり。

PRESENT

森友哉選手のサイン色紙を抽選で2名様にプレゼントします。ご希望の方は、ハガキに①〒住所②氏名③年齢④職業⑤電話番号⑥小誌の感想を明記の上、〒101−8381ベースボール・クリニック編集部「森友哉選手プレゼント」係までお送りください。締め切りは5月31日の消印有効。当選者の発表は賞品の発送をもって代えさせていただきます。ご応募いただいたハガキの個人情報は、当選者への発送、確認事項の連絡、小社の企画の参考とさせていただく以外の目的には使用いたしません。

SPECIAL INTERVIEW
森 友哉
#10
TOMOYA MORI